

書評

〔評者〕
青木 眞
感染症コンサルタント

ネルソン 小児感染症 治療ガイド

第19版
著者 齋藤昭彦
監訳 新瀨大学小児科学教室
Nelson's Pediatric
Antimicrobial Therapy 19th Edition
これが世界標準の
小児感染症治療だ！
エクスパートによる
グローバルスタンダード
本邦初訳
新学舎出版

ネルソン小児感染症治療ガイド

原書第 19 版

齋藤昭彦 監訳

新潟大学小児科学教室 翻訳

●B6 変・頁 296 発行 2013 年
定価 3,570 円(本体 3,400 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-01808-1]医学書院刊

はじめに

聖路加国際病院院長の日野原重明先生のお招きで筆者が帰国した 1992 年当時、日本の臨床感染症とでも呼ぶべき領域はきわめて希薄であった。筆者は臨床感染症の軸となる抗菌薬の削減・適正使用をはじめとする感染管理、感染症診療にと動いた。研修医教育も始め、その対象に当時小児科研修医であった齋藤昭彦先生の姿もあった。時に厳しすぎたかもしれない教育も彼は甘んじて受け入れ、今度はその齋藤先生が小児感染症領域における日本のリーダーとして彼我の格差を是正する番になった。監訳の序で齋藤先生いわく「海外と国内での小児における抗微生物薬の使用に関するギャップがある……(中略)……国内の臨床の現場でこれらの問題は大きく、これをどう解決し、そして世界標準の治療にどう近づけるかはこれからの大きな課題である」と述べている。

使いやすい構成

成人の感染症で定評のあるサンフォードマニュアルと同様、版を重ねた本マニュアルも大変使いやすい構成となっている。その背景には「臨床小児科医マインド」とでもいえるべきプリンシプルがあり、それは監訳者の友人であり原著の編集責任者 John S. Bradley 医師による以下の冒頭の言葉でも明らかである。

「初版から、FDA(米国食品医薬品局)が疾患に対して提示している以外の多くの推奨を本書に記載してきた。その理由として、抗菌薬の初期治療が行われる際には、多くの場合起炎菌が判明していないこと、標的として感染臓器も原発ではなく続発してその臓器に及んでいる可能性がある……(以下省略)」。病初期、問題の臓器も起炎菌も不明な状態で診療を強いられることが多いのも小児感染症領域の一つの特徴だろう。何より、子どもは自分で訴えることができない。

以下、内科医であっても印象に残った箇所を少し紹介する。全般的に各治療薬、その投与量、投与法の表などはすべてエビデンスのレベルと共に示されておりマニュアルといえども「精度」が高く、内科医にも参考になる点が多い。

〈米国小児感染症臨床レベルの高さを示すもの〉

2 章 抗真菌薬の選択：ポリコナゾールは CYP2C19 で代謝されるのでアジア人に副作用が出やすい(人種が検討対象になるのは米国教科書の長所)

4 章 市中 MRSA：過去 10 年間クリンダマイシンの使用が増加しているが、CD 腸炎が増加していない(疫学

的観察が最初から制度設計されている米国)

13 章 腎不全患者に対する抗菌薬療法：米国における臨床薬剤師の活躍は小児科領域でも

16 章 抗微生物薬の副反応：複雑性尿路感染症に対するシプロフロキサシンによる筋・関節・腱への影響は FDA への報告する前方視的研究ではコントロール群よりも大きい(4 章と同様に疫学デザインに抜かりがない米国)

〈小児は小さな成人ではない〉

1 章 抗菌薬の選択

・経口ペニシリンより経口セファロスポリンは、いくぶん安全性が高く懸濁製剤では味が良い。エステル基のあるセフロキシムとセフボドキシムは最も味が落ちる。後発品は元の製品と比べて好ましい味でないこともある(内科医が「味」を意識することは稀)

・アモキシシリンの中耳液における長い半減期……(薬物動態の検討は中耳液にまで及ぶ)

12 章 肥満児に対する抗菌薬療法

・各薬剤の脂肪組織への移行性の違い・程度を分けて理想体重を利用したり、脂肪量を勘案したりする(体重あたりの投与量が重要な小児科では肥満児の薬物動態はきわめて重要)

小児を診るすべての医師に

齋藤先生が帰国されて 5 年余の歳月が経過。この間、日本のワクチン環境の改善、新潟大学小児科学教室の教授就任など大変な活躍をされたが、出版という点からは雌伏の時期を過ごしていたような気がする。今般、その齋藤先生とその門下の先生方が小児感染症領域でバイブル的存在のマニュアルを翻訳され世に問われた。

私事で恐縮だが西暦 2000 年、日本人として初めて小児感染症フェローシップを開始するにあたり齋藤先生が下さった手紙を筆者は大切に保管している。それを改めて読み直しながら平坦ではなかったであろう彼の米国留学・研修生活を思い、また優れた若手医師をその黎明期に聖路加病院で教育する機会を与えられた幸せをあらためてかみしめている。自らは訴えることができない子どもたち、途方にくれる保護者のアドボケーターとしてのぶれない齋藤先生の軸の下、多くの後継者が集まっているのも心強い。

小児科診療に携わる多くの医療従事者に読者を得て、減少一方のわが国の小児に適切な感染症診療が行き渡することを期待しています。